

## ノイエスだより

ノイエス朝日(朝日印刷工業株式会社)  
前橋市元総社町六七番地  
電話 027・255・3434  
FAX 027・255・3435

先日、イタリアのペローナ野外オペラの放映をしていました。

世界中から観に来た人々は、一生心に残る素晴らしいものだった・・・と感想を述べていました。

作家の井上ひさし氏が講演でこんな話をしています。

劇場に来る人はまちまちで、彼女との観劇のためにとった席(後から来ると思つて空席になっていたが・・・彼女はキャンセル、チケットはどこかのおじさんに売ったのか?)は、知らないおじさんが座り、その隣には、若夫婦に邪魔にされたおばあさんが座り、その隣には、出演俳優の大ファンが・・・、誰もがいろいろな事情をかえながら舞台を観ています。

舞台が良いと俳優も観客も不思議にまとまった空気になり、個人的な事情はすべて忘れ、魔法にかかったように満たされた気分になり、それが小説では味わえない、その場限りの一過性の醍醐味、舞台の魅力だと。そして、日本の場合は、観客が走り飛び乗る終電車という状況がなんとかなれば・・・という願いのような話でした。確かにコンサートなどアンコール前に早く車を出そう、早く帰らなくては・・・という個人的な事で席を立つ人がいますが、何分でもない時間にバタバタすることなく、舞台上で演じられた作品の余韻にひたる位のゆとりを持ちたいものです。

文学館や美術館、ギャラリー、演劇、コンサート、映画などに行く機会が多いのですが、観客としての立場で感じることも。また内側の企画者として考える事には相当の格差が生じます、出来るだけ相手側の視点で物事を考えていかななくては幅がどんどん広がるいっぽうです。

マンネリ化にならずに、いつでも新鮮な水が流れるような企画を考えていくためには相当の試行錯誤と経験が必要ですが、いつでも、あらゆるものを受け入れるための大きな器と余力(自分の限界を規定しないこと)と、好奇心、積極的なフットワークを持ち続けることは大切です。その中から何を・・・というものを見つけ精力的に組み立てていけば良いのですから・・・。多くの知識や人間的な魅力に溢れる人々がノイエスには来廊していますので、そんな話の中にもヒントは隠されています。見つけ出す楽しさと、組み立てる楽しさ・・・大変な苦労など考える前に優先順位を考えれば答ははっきりしてきます。心身とも健康であれば言葉も企画も閉鎖的な世界から広がりのある開放的な魅力ある世界を多くの人々に提供できるのではないかと・・・と心から思う毎日です。

(武藤)

## ノイエス朝日の展覧会

齊藤建司作品展 ― 67年目の夏―

会期 八月四日(土)～十五日(水)

午前十時～午後五時三十分(最終日は午後五時)

会場 スペース1・2

齊藤建司さんが長年テーマにしている戦争の悲惨さと平和への願いを作品に感じ、そのマチエールの中に、微妙な色彩の中に、そしてモチーフの中に、語り伝えていくべき大きなものを多くの人々に、作品と向き合い、考えて欲しいと心から願います。

今年、齊藤さんは、特攻基地、鹿屋、知覧、指宿の戦跡取材も終え、新たに作品と向き合っています。

## 北詰眞弓展 ― サヨナラ 美しい国 ―

会期 八月十八日(土)～二十六日(日)

午前十時～午後五時三十分

会場 スペース1・2

3・11から日本人は多くのものを失いました。その失ったものが、どれほど大きく大切なものだったのか。それは再生出来るものなのか?

多くの問いを提示してくる・・・と感ずる作品。何に「サヨナラ」なのか。サヨナラは、スタートなのか。会期中、作品と静かに対面していきたいと思えます。

## ノイエス朝日(ギャラリー) 休廊のお知らせ

七月末は、ノイエス朝日(ギャラリー)は休廊しています。八月の展覧会は右に記してあるように八月四日からの開廊となります。休廊中スタッフは不在ですので、平日のギャラリーにつきましてはの問い合わせは、隣のDips. Aの橋本までお電話下さい。

Dips. Aの電話 027・254・1212

## ノイエスのティータイム

京都の祇園祭、山鉾巡行と神幸祭と博多祇園山笠のテレビ中継を見る機会があり、桐生生まれの私としては



「血が騒ぐ」といった感覚にとらわれました。東北の祭も色彩豊かな、伝統的な鹿踊りなど上州の祭とはまた違った独特な雰囲気があります。

祭りは、見るのも楽しいですが、参加する方が数倍も楽しめます。地元でなくても輪に入り三十分もすれば、踊りなど自然と覚えてしまい、来年もまた踊ろう・・・という気になります。前橋に住んでからも遠くから八木節の音楽が流れてくると自然と子供の頃の風景や情景が浮かんでくるのですから不思議です。

前橋の街中で子供たちが祭りのお囃子の練習で太鼓を叩いたり、横笛を吹いたりしている姿をみるだけで心がジーンとします。時代が変わろうと祭りのようなものは続けていくことがどんなに大事なことになるのか再認識しました。機会があれば、京都も博多も、富山八尾の風の盆や遠野の鹿踊りも訪れて見てみたいものです。

## 〈序を読む〉

先日、詩人のK氏と一時間ほど宮沢賢治や堀辰雄について話をしました。彼は、賢治の「注文の多い料理店」の「序」について読んだ?と言って文庫本のその部分を開いて渡してくれました。「序」ですから短いので目を通すと、以前に読んでいるはずですが、本当に深みのある良い文章です。萩原朔太郎の「青猫」の話も出ていたので帰宅してから全集の「青猫」の「序」も読みました。

利根川に近き田舎の小都市にて 著者  
最後にこう記してあります。

「序」に書かれているのは、自分の詩について、気質について、詩の本質について・・・。活字は自然に滑り込むように身体に入っていくような感覚でした。

いかに、きちんと本と向き合っていなかったかを反省し、読むという姿勢を正し、これからはしっかりと勉強しなくては・・・と思いました。

昨日は少しも浮かばなかった文章が八木節のお囃子を思い出し、一気に溢れた・・・といった祭の悪戯です。